

「われよく汝を護らん」

住 職

うさぎと亀が競争したという童話があります。幼いころ読んでもらった絵本の一つです。うさぎは足が速い。亀はのろい。文句なしにうさぎが亀



(月田幹雄さんの作品)

より先にゴールインすると思う。しかし予想に反して、結果はうさぎが負け、足の遅い亀が勝つという話です。

なぜそうなったのか。亀は、ゴールをめざして一歩一歩、歩みを進める。うさぎは、亀の歩みを見て亀の力を見くびってしまふ。そこに油断が生じ、怠け心が顔を出す。途中でひと眠りと洒落込んだが目の覚めた時には、すでに亀はゴールインしている。うさぎが不覚をとったことを悔やんでも「後のまつり」です。

人生は勝ち組と負け組を作ります。成功した者が勝ち組、成功しなかった者は負け組です。それを「努力したか否か」で分けてしまふ。何をもって成功というのかには問題も残りますが、「努力したから、希望する学校に入れた」、「努力したから、頑張ったから、事業が伸びた」などという。「その通りだ」と思う反面、そうであるなら「成功しなかった者は、努力していない」といえるのだろうか。この世は努力していても、いくら頑張っても成功の芽が出ない人びとであふれています。

自分の才能や力を過信するとき、うぬぼれの心と相手を見下す心が知らぬ間にわいています。ここに油断が生じ、怠け心もでる。亀は「人生は、努力だ。精進が肝要だ」ということを顕わし、うさぎは「怠けると後悔するぞ、油断するな」という人生訓を示しているように受け止めることもできます。

しかし、「もう充分頑張った。これ以上頑張れよ」といわれても、何をどう頑張ればいいのか分からな「い」と訴える人には伝わりません。自分の人生を勝ち負けだけで片付けることができないのです。

自分の人生を、虚しく過ぎる人生（虚）で終わってしまうのか、それとも、充実した実のりのある人生（実）であったと受け止めて生きぬくのか。人生の本質にかかわることです。

うさぎと亀の童話は、勝ち負けの話を通して人生の要を説いているといたしております。うさぎは、姿もよく足も速い。才能もあるように見えて、人も好く。亀はその逆です。のろまで、才能も有るようには見えない。したがって人も近づきにくい。「あなたはうさぎですか、それとも亀ですか」と尋ねられたら、どう返事できるだろうか迷います。うさぎ

ほどの格好よさはないのに見栄をはり、我をはって自惚れている。また、才能のない我が身の現実を知るときは落ち込むが、亀ほどひたすらに努力はしない。調子がいいときは自惚れ、つまずくと落ち込む。これを繰り返しながらの日々です。

このような私を「なんじ 一心正念にしてただちに來たれ、われよくなんじを護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と、阿弥陀さまが呼んでおられる。浄土につながる「唯一つの道・白道」をこの身に届けて、「來たれ」と呼びかけておられる。お釈迦さまは「ただ決定してこの道を尋ねて行け」とお勧めくださる。

うさぎより先にゴールインした亀は、仏様の力によったのです。亀の努力の結果ではありません。

うさぎは、自分の力を過信し、仏の力を軽視するすがたです。亀は、仏に成れる道は、ただ一筋に阿弥陀様の声に導かれ、大悲の心に抱かれて生きるすがたです。「生きて虚しくない人生」に手を合わせ、お念仏もうすばかりです。人生は勝ち負けだけではありません。

## 「い」縁

「ご縁」は仏教の大切な教えである「縁起」に由来する言葉です。すべての物事は互いにかかわり合って存在していること、あらゆる存在が無限の過去から繋がり合って現在にいたっていること。

宇宙のあらゆるものは時間的にも空間的にも結びつき合って存在しているのであり、一見バラバラに存在しているようであっても、単独で独立して存在しているものはないということです。

また、それは人間の思いや計らいによって作り出すものではなく、私たちの浅はかな考えでは到底理解し尽くすことはできません。

人間大人になれば自分の力で生きていくようであつても、赤子のときから世話をしてくれた親を初め様々な人と出逢うご縁のなかで助けられ育まれて「今」があります。また、自分の親にも親がいて、その祖父母にもまた親がいたわけですから、顔も知らない無数のご先祖のご縁で、今の自分が存在する

という、いのちのつながりに感謝することは大切です。

また、様々なご縁によって私たちのいのちは支えられています。「多くのいのちと、みなさまのおかげにより、このごちそうをめぐられました。」という食前

の言葉には、多くの動植物のいのちをいただくかなければ生きてはいけない私たちのあり方への慚愧の思いと、食事に携わる人々へのご苦労に対する感謝の思いが込められています。もちろん、食事だけでなく、日常生活の何気ない営み一つ一つを「ご縁」というまなざしから見れば、そこに多くの「おかげ」や「ご恩」があり、私の人生が支えられていることが見えてきます。

あなたと私も、そして仏様と私も、不思議なめぐり合わせがあつて、ここに出逢っているのです。つながり支え合うこのいのちが、仏と成るいのちであると頂くこと、そういう仏様とのご縁、仏縁を大切にしたいものです。



## 報恩講法要にお参りして

田川 一夫

平成二十五年十二月二十日に、報恩講にお参りさせていただきました。住職から、『報恩講とは親鸞聖人の御遺徳を偲んで、その御恩に報いる集いである』とお聞きしました。

恩に報いるとは恩返しをすることで、例えば、誰かに親切にされたら感謝する、物をもらったらお返しする、ギブ・アンド・テイクで双方が満足する、これが世間でいう恩を返すとか返さないかという常識だと思っていました。

親鸞聖人の御恩に報いるとは、何をどうお返しするのかと、少し調べてみました。仏教でいう報恩とは、インドの言葉で『クリタ・ジ



ユニャー』といって『なされたことを知ること』という意味だそうです。聖人がなされたこととは「ほのぼの」の第十七号に、わたしの「いのち」に与えられて「めぐみ」であり「めぐみ」に応えることが報恩である。（仏になる道を開いてくださったと、住職のお言葉）報恩とは、この私の為になされたことを知ることであり、私が救われる道は、お念仏しかないと教えて下さったことを知ることである。理屈では解っていても、まだまだ頭が下がる処までいきません。これからの聞法の集いには、私ひとりのためにお説教されて頂いているとの思いで、聴聞させていただきます。

## 新春 初法座

一月五日、初法座がおこなわれました。お勤め、住職の法話のあと、檀家の皆さんと手作りのおせち料理をおいしく頂きながら、空 早苗さん上演の紙芝居「しんらんさま」を見ました。その後、木下雅恵さんがきれいな歌声で「坂の上の雲」テーマソ

グを独唱されるのをうっとり聞き、森本順子先生のピアノ伴奏で皆さん一緒に「青い山脈」等数曲、楽しく唄いました。今年も、和気あいあいの雰囲気一年が始まりました。

「新春初法座」に参加させていただいて



木下雅恵

ご縁がありまして、信行寺・コーラス雅会に入らせていただいております。

仏教讃歌は、お念仏の教えや人としての思いやりの気持ち優しい言葉や美しい旋律に表われていて、歌っているととても穏やかな気持ちになります。月一度の練習日がいっつもとても楽しみで私の癒しの時間になっています。

初法座の日は、厚かましくも皆様の前で一曲歌う事になってしまい朝からドキドキでした。でも住職

様のお話の中に、「今の自分を受け止めて、自分のできることを自分にできるようにすればいい。」という言葉（ごめんなさい。自分に都合よく解釈しています。）があり、少し気が楽になりました。少しですが・・・。

NHKドラマ「坂の上の雲」のテーマを歌わせていただきました。

「凜として旅立つ 一朵（いちだ）

の雲を目指し」という歌詞が私は大好きです。本当は小心者で、上がり症の私ですが、会場の皆様の暖かい雰囲気になさえられて歌いきることができました。

実は、歌はあまりちゃんと習ったことはないのですが、これからも「雅会」の一員として心を込めて歌っていこうと思います。

皆様よろしく願います。



## 赤尾の道宗さん

副住職

昨年、信行寺の研修旅行でも訪れた越中五箇山には道宗という篤信の念仏者がおられました。幼くして母親を亡くし、十二歳で父親とも死別されました。親に会えない寂しさから十八歳の時、親に似た顔の羅漢さんに会おうと思いい九州の羅漢寺に行くために旅立ちました。その道中で、ご縁あって蓮如上人に出逢われました。この出逢いが一生の転機となり、羅漢寺参りをとりやめて蓮如上人のもとに留まることになったのです。初めて蓮如上人にお会いした時、感涙を流して三日三晩座を立たずに聴聞したといひます。

とても熱心な念仏者になった道宗さんは、故郷の五箇山に戻ってから井波の瑞泉寺まで毎月三十km以上ある山道を通って聴聞に聴聞を重ね、また一年に一度は京都の本山にお参りしました。いまのようになり物がある時代ではないので徒歩でそれだ

けの距離を歩くだけでも大変なことですが、雪深い土地柄、冬の大雪のときにも欠かさずお寺に参られた逸話がのこっています。

また、如来さまの四十八の本願になぞらえて四十八本の割木の上で眠り、痛みで目覚める度に念仏を称えておられたという逸話もあり、道宗さんが開かれた行徳寺には割木の上で眠る姿の木造が伝わっています。フローリングの床に、直に寝るだけでも身体が痛くて寝むれない私たちからすれば、なぜそこまでしなくてはいけなかったのだろうか、という素朴な疑問がわきますが、道宗さんにとっては「このわたしをそのまま救うという阿弥陀様のお慈悲、本願のハタラク」に出逢ってからは、その広大無辺のお心もつたいたなく、その如来様を忘れて眠りこけている自分が申し訳なくて、そうせずにはいれなかったのではないのでしょうか。

深く自己を見つめて、戒めのために作られた「道宗心得二十一箇条」には「後生の一大事のちのあらんかぎり、油断あるまじき事」とあります。

## 開かれたお寺づくりをめざし

### 『太子堂法話会』の お知らせ

副住職が月一回、日曜日に（何週目かは不定期です）どなたでも自由に参加出来る法座を開いております。浄土真宗以外の宗派の方も仏教を知らなかった方も大丈夫。その時によつて、いろんな方が参加されるので面白いです。

一期一会で、これからもよろしくお願ひします。

『太子堂法話会』に参加し始めて早いもので六年になります。当時、仏教初心者だった私は、法話の内容はもちろん仏教用語もチンプンカンプンでした。

元々「自力」の強い性格ですので「他力の信心」を学べば学ぶ程、とても難しく感じました。今でも理解出来ていないとは思えませんが、毎回根気強く繰り返し法話を聞かせて下さる副住職さんのお陰で、日々の生活の中で少しずつエッセンスが染み付いていると感じることが増えている様な気がします。そして、これから仏

教を『味わえる』人生を歩んでいけたらなと思います。

お寺を開放して頂き、このようなご縁を頂いていることは本当に有難く、これからも法話会の輪が広がっていくことを願っています。

長井 洋子

皆さまの参加をお待ちしています

### ◎寺子屋先生、始まります！

三月の春休みから、新中学二年生位のお子さん対象に英語教室を始めます。（基礎レベルから学びたい方も対象）

寺子屋先生の副住職は、英語が大好きで学生のころからたくさんのお友達がいます。

「英語が使えると楽しいな」と思えることが英語を好きになる近道と思って、指導いたします。

春休みは体験授業があります。

お問い合わせください



# 信行寺行事予定のご案内

## 春の彼岸法要

三月二十九日(土) 羽溪了先生  
三十日(日) 住職  
両日とも二時より

## 第十三回門信徒会総会

四月二十六日(土)  
午後二時より  
おつとめ、総会、法話

◎紙芝居「しんらんさま」第三話を  
上演予定です。

## 親鸞聖人 報恩まつり

日時：五月二十一日(水) 午後一時より  
会場：神戸文化大ホール

\* 信行寺「雅会」もコーラスで  
参加します。

◎入場には整理券が必要ですので、  
お寺にお問い合わせください。

## ◎編集後記

春です。暖かい陽射しを感じます。  
卒業と入学の季節になりました。娘が「卒業とは、出口  
ではなく入り口なんだ」と歌っていました。なるほどな  
あ・・と、微笑む私です。

人生とは、出会いと別  
れの繰り返しですが、心  
の中にはいつまでも変わ  
りなく一緒の世界がある  
から、前に進むことがで  
きるのでしょうか。



また、仏縁(仏法に遇うこと)は、大海の中から亀がひ  
よこつと顔を出して、たまたま流れてきた流木にこつんと  
当たる位の確率だそうです。  
さみしさも嬉しさも数々の出会いの「ご縁」は、ひとつ  
も無駄なく私を支えてくださっています。  
あなたに出逢えてよかった・・・なもあみだぶつ

米田 悦子

※編集長：米田恵悟(副住職)

編集委員：多田文男・多田清子・米田悦子(若坊守)  
空早苗

このメンバーで「ほのほの」を編集しています。

\* 皆さんのお声をたくさん載せたいと思っています。  
ご協力お願いします。